

たていわの
ゆとり空間は
地球市民型

水と緑の星の、鱒沢溪谷。



春雨、梅雨、秋雨、甘雨、長雨、涙雨、
時雨、霧雨、水雨、寒雨、豪雨、雷雨、…
日本情緒をしっかりと装う雨もがたり。
その雨雲に思まれた館岩の大地に
70余すじも膨まれた葉脈状のV字谷。
独特の溪谷美の一つに鱒沢溪谷があります。
その岩場は水と緑の星・地球史の謎を
余すところなく物語っています。



南アフリカ原産の切り花「カラー」。オランダ人によって日本へ上陸して200年。赤かぶ、高原だいごん、山菜やきのこ、いわなやまめ、そば、りんご、トマト、りんどう、会津高原牛、木材や木製品などと共に、館岩の特産の一つになりました。わたくしたちが出荷するのは、溪流育ちの涼風の精です。



カブトムシのオスにはツノをつけなきゃ！
枯れ枝を組んで気づくのは、森の神秘の見事さです。



あらゆるものが、国境を越え、地域が日常的に海外と直結する地球化時代に向けて、
確立するのは、個性と魅力ある「自分」らしさの存在感です。

＊古代ギリシャでは金と鉄を一〇対一の割合で交換したという。鉄は農具や武器に欠かせない、文明の母であった。純度の高い鉄は銀白色で、軟らかい。これに炭素を加えると強度を加減できる。しかし、鉄を溶かす温度（一五三九℃）を作らなければならない。鉄分は地球の核をなす物質で、火山活動により噴出したり、地中で冷え固まったりする。火砕流や花崗岩類ではガラス質やアルミニウムに次いで多い成分らしい。木炭は、その風化層から海砂鉄や川砂鉄、山砂鉄として採集した。火の山の山砂鉄は無尽蔵で、花崗岩塊の田代山の名称に、砂を人工の川に流して鉄分を沈澱させる鉄穴（かんな）流しという技法の跡がしのばれる。太子堂の名も、作業用の箕を作った職人仲間が信心したという研究者もいる。田代山大明神の見守る世界はミステリアス。ヒョットコも製鉄炉の火吹き男ゆかりの民俗ともされるなど、館岩の昔語り資源は賑やかである。

たとえば、『ふくしまの水三〇選』の鱒沢溪谷。昔は、田植えの頃にマス、霜が降る時分にはサケが遙か日本海から二百キロ以上、銀鱗をおどらせて母なる源流の清水域をもとめて潮上したという。そのみごとに溪谷美を誇る岩肌が白つぼく映えています。

これが黒雲母花崗岩で、今から六五〇〇万年前、それまで二億年も栄えた恐竜やアンモナイト時代末期の岩場。その頃の地球上は火山活動が盛んで、マグマとけている岩が地中で冷え固まったものが露出したようです。

湯ノ岐川周辺は、鮫石や米つぶ石と称される石灰質の殻で固めた岩が露出していることがあります。この化石は更に古く二・三億五〇〇〇万年前、石炭のルーツ・大森林時代からサンゴ類が栄えた時代にかけて、世界中の海に棲んでいたフズリナ紡錘虫、魚たちが、広がる緑の陸地にあこがれて、進化の夢をむさぼった太古の海底の地層です。

西根川周辺は火山列島・日本に典型的なグリーンタフと称する海藻混じりの緑色凝灰岩。今から一五〇〇万年前の列島誕生時に山頂が水中に沈み、海底が尾根となった地殻変動の激しさを物語っています。たかつえは、その後の陸上火山活動による凝灰岩等の層です。

21世紀は、郷土の原風景と対話の時代。保全身から創造型へと環境づくりの発想の転換が求められる今こそ、わたくしたちは水と緑の星・地球の生態系の一員としての自覚と行動力を郷土の大地に学びます。

